



里見八犬傳拾二編
卷廿三



709
71



門一遠 13
號 709
卷 71



明治三六年
十月九日
購

南總里見八大傳第九輯卷之二十五

東都 曲亭主人編次

第三百十四回 苛子の海中とちやまと保千金とちやまを撈まきは

復説大江親兵衛あまごころいねえあへ舟覆あふらふり。水底みづそこに喪あはれる金子かねと名刀ななうを惜おしめも甲斐あひ多おほし。代四郎よしろを慰なぐさめて。世術よじゆつあり。像輒やまがけに二ふた海うみに没ひり。よ。い。か。く。と。思おも難がたで。單扁舟ひとこまを操あやつり。岸きしへ寄より。在あり。程ほど。姑且なほと。代四郎よしろの波濤なみを披ひらき。忽たち然にと。扁舟へんしゆの真邊まへに浮うか。り。面おもてを捧たげ。一箇ひとこの相あひを。舟ふねに撞ぶれ。と。投入いれる。と。これ。は。是こゝろ。別物べつぶつを。失うせ。る。那あの。金かね。を。け。れ。親兵衛あへ。扶たすみ。不堪たふぎ。と。楫こを。出だし。て。代四郎よしろ。推おし。せ。ま。う。ま。る。程ほど。代四郎よしろ。舟ふね。を。舩ふね。に。掛かけ。込こめ。と。舟ふね。を。乗のり。て。耳みみを。傾かむ。り。ち。敲たたき。鼻はなを。絞しぼり。水みづを。出だし。て。一霎ひとしげ時とき。呼よび。吸ひき。定さだま。り。腰こしを。跨またり。大おほ小この。刀やいばを。一ひと口くち親兵衛あへ。渡わたり。與あら。は。れ。是こゝろ。亦また。紛まぢ。も。あ。ら。げ。り。け。小月こづき形かたちを。け。れ。親兵衛あへ。憶おもひ。に。雀躍さくあつ。と。楫こを。

八代傳九輯卷之二十五

東都堂藏

引抗け跪て受戴せし腰不帶て不測の恩義を感ずるに己の袖を濡る刀兒を拭ひは
 代四郎の向ひて歎ひを舒る事。倚伏の糾ふ纏の如く彼今小創ぬ阿史が細法六松麻茶は戸田河
 邊の船と論して死す欲や阿史が命運の顛末は我姫神の示現を豫聞きし事
 増せる今の掙た妙なる既小千仞の水底に論て其首とも知る事。西國の宝貝と撈り
 得て赤石の海を奇真珠と撈採て命死ける阿波の登戸功長邑の男狭磯へも是は傳
 妻の秘して身小従ひの罪ゆがみ死所為れども夙念違ひ有候瀬に連て身小の仇を
 討ちし思念の外幸ひも曩ふ身小の故も富山小我宅眷副六松と安女過さるる
 去伏姫神の神恩徳誼開か萬分の一も復しめぬと思ひ候れば如何ぞ是は加へん

年い多ても酒法は今昔おかたねと畢竟千仞の水底に擲りて輒く金と小月形の名刀さへ
 山登人力のて做し給ひぬ。折々の所は誇り誠心と親兵衛も感嘆して今も
 那毒茶中られる我伴當も夫役高工們のふり心許を卒先舟と還せしと代
 四郎然と心て身小起り親兵衛代と楫を操りて舊の船邊に漕寄る扁舟を敷
 住り親兵衛代四郎と偵小件の要金と那海賊の頭領の首級を我船小會容る然
 那這と檢する伴當夫役高工毎の付き隨て死活を知ると又御宗親兵衛が難
 なる五六個の小嘍囉們の脚を折れ交へ晋と打脱して嘯に苦む息絶はれ餓へ
 聲小叫ぶ枯野の霜の鳴く虫も知る可しと親兵衛ていふもかへば速く懐く護身
 囊に合ふ小内多き灵石の奇特多し。主共侶の海に没りし小囊の毫も濡さざりて親兵
 衛が着る衣さへも乾いて湿度なき潮氣の餘波さるる。當下親兵衛は這靈玉の

護身囊額不推當うち念とて即便復這裏とて仆れ方母の胸を漏さる
 拵は權且して伴當夫役船公高工們同音不忽地苦と叫ぶ伶行き感服身
 僥け共侶不反吐の衝と大々々々醜園子濁酒喫べ涯り吐盡し心地清き
 まり甲乙通て我の復とて親兵衛をる代四郎を又仆れる儘見們を罵罵
 罵罵其を心とるり蓋て有般系向難し親兵衛然と微笑て有賊難箇様
 と海賊們が奸計に陥られ首より一千両の要金と一個の老賊が竊合て扁舟に乗て逃
 んとはを親兵衛が趕携りける舟覆りて難義の折燒雪代四郎が来る來て件の賊を討
 捕るその支の尾も解示り又の奪其首仆れ盜見們的初我船うち入りしと桿
 毆伏するの餘為幾名殺難輩檢扱て洋へ放下るも有り若們他を親より
 代四郎ある御京水中で討捕る首級を合ひ出てさへ皆愕然と駭馬は悔てかそく
 陳きやう小可と毎本性愚直首を口腹と貪る為御制止とすやもて死地陥ることを

の知を命魂既絶と御武徳の馮の海賊亡びて這身々々恙多難生り洪福
 父母倍を御恩以後と慎むの饒をさるりと陪話と親兵衛は不不と我
 か折小奇く巧小謀り騙賊毎乗せられて小心届を等閑なり若們が行と五十歩
 歩の間の倘燒雪の帮助る我も亦大洋の底の水屑るぬ正不是我兩館の天地小ひと
 老年来の御仁政の餘福も有徳る愉快の勝とこれ這海賊の出来歴知と己の
 送恨へ素奴們痛痠弱りかも尚死ざるを便宜る片隅より皆牽起と結紐と携
 問せと公指揮の大家勇を立て兼り心も果む船擔附る麻索とる小抜合り群
 立蒐りて弱り俯る小嘍囉們を引起し縛縛り成檣へ般系ける開が中那舟經紀
 打扮る兩個の小嘍囉水冤鬼柄杓九郎灘渡破船二俱の兩脚を折れ起居を隨意
 るね氣力衰されば親兵衛隨即伴當下知て這兩賊と最も緊き責問せり休
 ぜ具招了き言とら听ふ他們的火家の兩個の頭領海龍王脩羅五郎今絶友查勘

大の出来歴陀々花酒の事伎倆の願末這回大江親兵衛門が京師へ赴く船を載る金
 多かるを知らず奪略も欲せども親兵衛の武勇あり且同船の武伴當們八九十名あり
 といへ他が火家と對沖せり有徳計り易くさきのでその母を引分んと段と旋り親
 兵衛が這港口に歇船し始り今純友查勘太の小嘍囉五六十名を從て情地陸地
 ろち登りて箇様々々の計畧を行ひ又海龍王脩羅五郎十餘名の小嘍囉を相俱り肇
 より那里の船小存の豫計りしるれば蟹崎十一郎照文が伴當を多く領て奥郡へと赴き及
 ひて開後不限に船より出てゆく者も亦尠くねば越ゆる之便宜なるを慮み衆と水寛
 れいらおせあはれいとそらとこまひ。鬼們假經紀の計策を以て事十二分お做りて親兵衛裏と書れて自他幾名の
 火家らへ海龍王へ討捕られて事の茲及びしとち出とて又陳をせり但し那蟹崎と之
 らと伴引かして開路を埋伏と敷も計り今純友が一親の造化いふは狹き美知を
 いとの不親兵衛數馬にて原來今旦賊難に我上とのあきとて亦蟹崎們の前路を在り開い

姥雪三更知るるも安危什麼とさるれば代四郎笑々膝を打ちて然りとをのぞく御向和君お
 告まき思ひて身單走りかたりかとも和君亦那脩羅五とちら首級のを榮留り老賊と水
 中を閉戦の最中之れ告る暇あきとて時後れて六日の昔蒲十日の菊小似れども花を
 実もある話説之抑鬱奥郡多城主の家臣と伴て蟹崎生們を誘引せり那設良四九二
 郎綾丑実ある人あまの他則海賊の頭領とせざる今純友查勘太が下を鑑敷五
 鬼五郎と喚做る那一隊の小頭領然れ寝兵打扮て相従する四五名も開火家小嘍囉
 る日と蟹崎生も我門も知るる存れ哄詐りて俱もくと千餘町樹拉深條其番山あり其
 頭山路入り折跡より東條高工們の内中路の案内を知るあり忽地聲を鳴りて
 刀袷們奥郡へもとるる路錯るがと招れ假四九二郎の五鬼五郎へ省も其冷笑ひて
 他們が何をよく知る我城内へ赴く此山路を捷徑る人々欺れあると云ふ蟹崎生も小可
 惑ふて敢疑ざる引れても程不忽地前路の樹間より响馬と云ふは自來雄們を約五六十

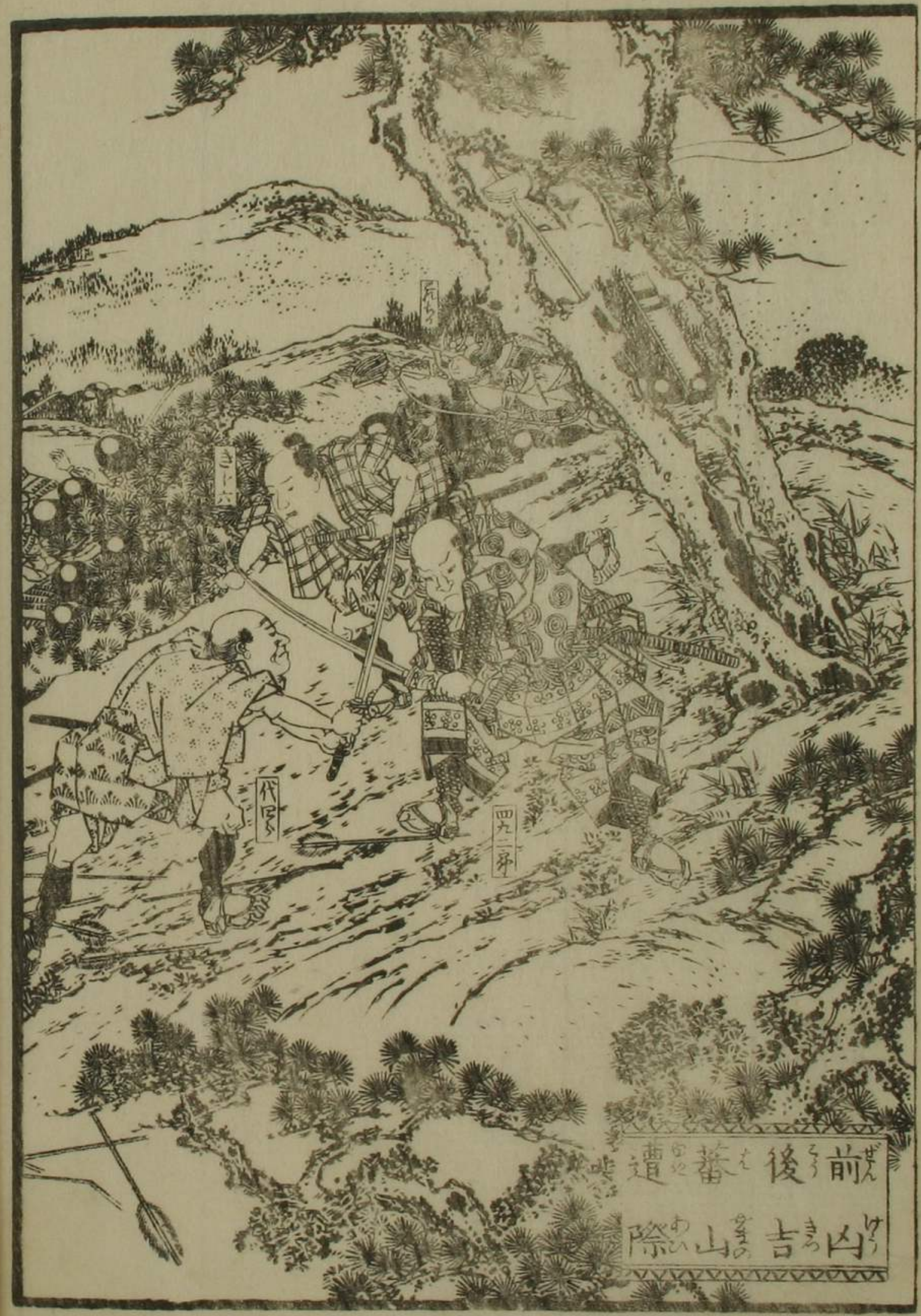
名敷皮と紙したる身甲小鉾脛衣と弓脇挾之箭を搭馳以或竹槍長釣を引提て
 路を横遮るる内中一個の頭領あり後その名を摩之知ぬ是則別人をも今絶友奮動太
 る身材叩く虎鬚を星做を眼を赫変るる鬚崎生們を疾視て若們他御の乱定見既
 鈍く我々が圍套入りて曉得る那里へいんとまや盤纏を身皮兵侶の命も這里差出
 る十萬億土走りねと暗げ衆賊同音小鬨を為の腹を敲りて箭前を蜚とて鬚崎生似
 勢の當るるもあつれれ鬚崎生も可も只得刀を引抜りて箭を破拂々々一霎時の敵を柱
 ばあつら折故意と後れる假四九二郎の五鬼五郎の隊の小嘯囉と相俱水做さ長
 刀を抜見りて背より吐と嘯囉と競ふ前後の賊徒の氣を吞れる躬方の鬚兵伴
 當們及那直塚紀二六支防に戦ふ擬勢も一況飲食の與の眼をまけは後夫役高工
 們的右往左往に逃迷いて矢傷刀瘡那這と痛癢を肩ぬもより一鬚崎生も小可も免れ
 かに必死の乱戦樹粒と看相柱えて透もあつれ刺錯へんと思へ一歩も退りて力と勦る

覚期の折る復忽然と之前後の茂林に鯨波大く波りて群立出来る居る軍兵ある其軍
 士衣賊徒の似せ但見る右より左より直鬼の武者二百名摠大将をか死に楊檀花紙の鎧
 戦袍に龍頭の兜の緒を締二十四挿る就鳥羽の征箭竹台高駒做と滋藤の弓を左の腕
 挾も右の腕麻毛と打振々々金作の大刀の白半皮の尻鞆掛て聖柄の匕首と挿副大提し
 桃花馬の雲珠鞆置して優りうち跨り白地小園藤の家花髯流做る旗一梳山風吹麻非
 走士卒と鷹の勢ひ群る虎の山峯を降りて羊と駈る小異る馬前小立る勇士猛卒天
 地を响く同音尖鋭く若們大胆無敵の看賊叩本郡小徘徊と白晝小前徑を做を後土民の
 愁訴あるも緝捕の爲に隣尾殿みくら向せをて天羅天四訓免るべく皆刃を伏せ跪て繩
 掛れと喚り呼聲共侶の前後も弓を鏡を透向る連放る征箭前鏢炮を空發前空丸あり
 るれば然も猛り草賊毎夫場四五名敷も仆され餘傷を蒙る敷る小追趕もあつれ
 賊是勢を折けて乱れ立る癖るれ吐嗟とより辟易と鬚崎生と小可の身場敵を中



六

八代傳九軍卷三十三



前
後
吉
山
際
遭
蕃
凶

るり。係然。不共侶。近つ寄隊。と指招。是は他郷の旅客。を。蛭崎照文。燒雲。與保。主僕。約莫。五十名。の賊難。路。幸。り。血戰。數刻。及び。者也。緝捕。の人々。の意。を。同。士。擊。つ。る。と。喚。り。呼。り。突。然。と。我。を。出。敵。と。擇。む。逃。れ。去。る。者。其。賊。と。當。る。儘。と。斫。付。せ。り。初。逃。る。伴。當。野。兵。高。士。夫。役。們。も。力。を。盡。し。招。れ。ば。か。る。來。て。部。助。お。り。も。ま。り。け。り。有。意。程。賊。徒。の。頭。領。今。純。友。查。勘。太。の。莫。も。像。く。小。折。杖。は。矢。傷。銃。瘡。と。の。も。逃。れ。逃。る。衆。賊。を。罵。獎。し。兵。每。蓬。今。爰。也。露。の。命。を。免。る。と。も。百。年。千。載。の。も。生。れ。死。ね。や。と。聲。喚。洞。と。三尺。有。餘。の。血。刀。を。振。り。打。つ。奮。撃。多。突。戰。阿。脩。羅。の。界。も。憐。や。あ。る。三。惡。道。の。秀。と。賊。首。を。武。士。勢。勇。力。一。人。當。平。け。れ。緝。捕。の。士。卒。も。亦。も。遠。圍。や。あ。る。敢。近。つ。兵。を。り。し。嶺。生。樹。と。密。せ。て。白。打。の。も。と。投。と。せ。り。查。勘。太。遠。さ。を。刃。を。捨。て。四。多。百。り。て。被。組。さ。る。查。勘。太。脅。力。の。勝。れ。數。人。所。の。痛。疾。亦。如。意。る。と。推。れ。推。れ。桃。お。程。那。四。九。二。郎。の。五。鬼。五。郎。返。一。合。ら。今。純。友。を。幫。助。て。蛭。崎。生。と。刺。し。既。走。る。近。つ。小。可。を。く。遮。り。止。めて。五。鬼。と。

刃と交つ。一上二下と戰ふ。當下那方る。查勘太の。瘡。肩。不。され。腕。剛。に。死。竟。の。も。煙。煉。る。られ。遂。不。蛭。崎。生。と。組。伏。せ。腰。を。短。刀。抜。出。し。首。を。搦。んと。さ。る。折。紀。二。六。迫。不。是。を。飛。か。像。く。走。り。來。り。背。より。七。查。勘。太。の。頭。髪。を。抗。て。彎。り。付。け。蛭。崎。生。と。反。復。し。主。僕。兩。個。で。辛。く。も。厭。ま。て。索。と。搦。り。然。這。方。る。五。鬼。五。郎。今。面。前。に。查。勘。太。が。捕。捕。る。を。見。て。より。魂。忽。地。天。外。に。飛。び。失。け。腕。乱。れ。受。大。刀。の。も。り。小。可。を。り。踏。入。り。肩。大。托。地。と。斫。付。し。起。り。も。立。ぎ。登。り。鬼。て。刀。の。緒。を。七。步。々と。結。紐。る。折。り。筋。方。の。親。兵。が。兩。二。個。逐。來。て。索。と。合。り。牽。立。け。の。餘。の。草。賊。五。六。十。名。大。隊。の。隣。尾。殿。の。勇。士。猛。卒。を。驅。逼。り。て。或。は。較。を。捕。れ。或。は。俘。囚。る。る。を。捕。捉。多。く。交。果。て。大。將。隣。尾。伊。近。主。の。隊。兵。を。取。合。し。組。る。結。縷。草。地。に。登。見。を。建。せ。て。首。級。実。檢。と。さ。る。折。蛭。崎。生。と。小。可。の。捕。捕。る。賊。徒。の。頭。領。今。純。友。查。勘。太。と。鋸。較。五。鬼。五。郎。の。親。兵。牽。一。伴。當。と。得。て。身。邊。に。赴。き。左。右。不。就。本。貫。姓。名。來。意。厄。難。の。夏。の。趣。と。想。て。兩。個。の。生。拘。を。解。き。隣。尾。殿。對。面。の。戰。場。を。

慰め功を言て宣す。和殿們里見氏の家臣を我々舊縁も似たり然る今料の急難故
極ひは草賊送るく入りて過せありての事。後を解示。近曾西海山陽海
賊毎遠く東海も免れ。這頭の諸浦船と歌め時々陸うち登りて旅客も居り。良し
うち入る害と做す。今純友查勘太と喚做す。下小頭囉
五六十名と從て五六日已前より。這蕃山船居る。今朝も土民の密訴あり。是より先回
謀見と遣して。その虚実を探せ。果て違はれば。并に捕捕見與。我々隊兵三百名
從て。悄き小城と出て。先這蕃山を捕圍せ。山路うち入り。涉獵り。各難義の折れ
只この一挙。草賊の根と断ぬ。後々の賊徒を相柱えて。時を移さ。よめて。出資せしと
不ゆ。且我歌船。事の仔細と海賊們が伎倆の顛末。同勘て。然而隊兵小吟。附て生拘
草賊小拷問の竹豆。加えさせ。今純友の呵責。梳き。始に首伏せ。り。かど五鬼五郎
們以下の小嘍囉。苦痛の堪む。支送も。招了。及び。彼他們が。出処。姓名。始に。捕も。の

折正可。知れ。今純友查勘太。這一夥の頭領。又鋸鯨五鬼五郎。并に小頭領。草賊
の。餘海龍王。脩羅五郎。の事。及那一夥の小頭領。水鬼鬼柄。九郎。灘渡破船。二と
喚做す。又海瀬龜正。覚坊。橋毛。船沼。受太郎。鉞。千本。河豚。六寄。鯨土。左衛門。潮冠。品
九郎。と名ある。下草賊。の。折捕。捕られ。但小判。鯨。吸。四郎。棘。鬘。骨。龍。八坂。間。田。沙。智。七
龍宮。鷄。魚。太郎。と喚做す。四個の草賊。今純友が隊下。も。名ある。小頭領。も。逃。や。亡。け。金
ら。む。とい。へ。涉。獵。れ。屍。骸。の。り。の。只。この。交。名。の。も。今。這。回。他。們。が。伎。倆。の。顛。末。當。家。を。云。の
船。に。載。る。金。子。を。奪。略。し。と。欲。す。同。船。の。後。者。も。更。假。藩。士。と。造。り。出。し。て。我。當。黒。を。大
平。引。分。け。陸。る。今。純。友。小。頭。領。小。嘍。囉。甲。乙。俱。五。六。十。名。這。里。埋。伏。し。て。結。果。け。ん。船。を
る。海。龍。王。們。が。陀。々。花。の。計。策。も。て。救。死。と。豫。准。備。の。支。さ。す。都。て。招。了。せ。れ。ば。小。可。可。れ。ん。
故。馬。憂。ひ。て。余。の。身。上。最。始。一。も。危。な。小。可。可。船。不。遠。り。て。身。の。安。否。不。見。る。べ。く。
這。方。の。も。報。知。せ。ん。と。誤。れ。ば。蚤。崎。生。沈。吟。と。大江。大。智。大。勇。人。縦。那。海。賊。們。が。謀

まを酒飯の為に陥れて命を喪ぐもわは渡莫這方の賊難と云く報知せる小心の與ふ宜か
 らむといふ隣尾殿うち受てその大江を甚麻多のぞと向れて登崎生徳々と見身が世に倚稀る勇
 武智畧功多の事の顛末を解稟共隣尾殿駭然と貌を更め嘆賞して亦奇し後生をこれ心
 許る各先退はれ我の漏る草賊を海渉獵を擲捕て馬頭を討て對面せん疾くといふ
 其のへと登崎主左右を立を御意辱くいふも在下門不測の御救助を必死を免れいひ捕漏る
 たる草賊を捨て退る義あり大江の代四郎と一個遣ふ事足る那里異變ありとも既
 時後れを身勢もその甲斐を承るへ有り置るうもやと辞す只管我も勇む隣尾殿の感
 念を倍思れる左も右も隨意すると勿論るをなれば雪となり馬頭も退るその大江より後生
 我の意を宣く傍へか捕捉果る日暮るとも必死に對面せざるゆゑと懇切な指揮を小
 可再議及ぶ身暇も多と走りかひはたと報詞の長潮も清心も委する水と陸地の災
 祥安危も親に衛耳と敬せ或は驚は或は喜び所果て憶も太息と吻頬と相て一方を

けふ禍鬼這里史阿叟の幫助あり又陸地史伊近主の緝捕の隊配合期しく賊一時誅伏の
 飲び不寐して思ふ是も亦我姫神の引接冥助の神力ありその人を浴て危を安んず其大功を
 論へ前出蕃山は賊の小頭領五鬼五郎と擲捕り後史大洋も波濤を潜れて海龍王を討
 捕て咱們を擲て十尋の底を千金と名力と頼も撈りゆる阿叟とて第一とまを次へ不知
 案内る山路も賊不意に襲れて亂前身を傷れも那草賊の頭領とせえ今絶反を擲
 捕て武勇と這地の城主不知れ登崎生不優を著る只行心有て功を咱們が不覺面伏今
 去と諦せ我慢心八大士の中逸早く兩館も見参る富山史老侯の危窮を拯ひなり又上總
 館山史反賊其金田藤と一度る二度生拘と君の死與不盡毒と其拂ひ又武藏の忍
 岡も政木大全と相伴て賢と薦る忠信を辱る世を兩國河原も石龜屋次岡大們的厄を解
 たり大甲大川の與りも其舊交不代り又下總る左右河原史大庵王の禍鬼を徒に敷き走と
 義烈院殿の御送骨と敵の為に喪る約莫這六大功我及者るとの情地みみくら肩

既矣狗の漏るる人賢とて不肖とて。故に孔子の言。耕也。耨也。耘也。穡也。不可荒也。故に孔子の言。耕也。耨也。耘也。穡也。不可荒也。故に孔子の言。耕也。耨也。耘也。穡也。不可荒也。

老圃の不如といふ。然る虎狼の猛も。水に没る。細鱗の魚も。及ばず。又白龍の魚服たる。

余且の網を免れる。此古語。晴の言。人の心も。機をばさぐ。已に知。敵を知る。小心の倒る。

困る。仁が今見の不覚の如。我義兄弟。都て七人。孝義忠信。世に稀。年来流浪の艱苦。

啜て仇を敷。悪の懲。或又會禁。伯母仕て。孝順。愛。亡父の志。兼嗣。

忘る。信乃。或。毒。悪。東人の。復。冤家の。為。誣。罪。人。

做。志。改。亦。友。の。與。老。故。怪。頭。那。人。の。親。の。灵。を。慰。或。又。奸。臣。

柳。苗。甘。ん。て。み。ろ。防。亦。果。牛。と。推。駐。め。聚。令。千。百。の。老。幼。男。女。一。個。も。傷。ら。せ。ぬ。け。る。

我。親。兵。衛。が。時。運。の。乘。と。名。君。武。德。の。驥。尾。の。附。る。軍。功。の。類。の。あ。れ。孰。も。學。び。見。ぬ。

よ。も。思。つ。我。の。不。賢。賢。達。と。懲。され。け。も。姫。神。の。神。護。り。致。と。心。つ。て。今日。も。井。蛙。の。淺。見。自。

恣。放。言。人。も。存。る。奉。止。の。ま。る。あ。れ。心。裏。恥。我。術。と。事。何。せ。入。累。水。路。は。赴。く。折。大。飼。

小父大田が。教諭を差。思。令。て。後。悔。胸。を。噬。る。の。姫。神。い。て。饒。さ。せ。君。子。の。必。る。獨。を。慎。

む。と。り。古。語。を。胆。銘。と。と。る。べ。く。べ。く。と。當。と。合。く。天。を。ち。仰。ぐ。怜。れ。れ。も。童。子。の。情。態。

然。も。九。歳。の。性。美。を。代。四。郎。感。且。慰。め。然。る。不。悞。ひ。七。五。氏。の。語。君。子。と。欺。く。陷。る。

ら。と。い。い。ハ。死。身。の。上。似。り。と。そ。の。方。と。て。ま。れ。仁。人。君。子。も。い。ふ。ま。て。欺。れ。る。と。は。そ。の。欺。を。信。う。

と。漫。不。陷。ら。れ。衆。賊。と。矢。場。不。敵。に。仆。て。海。龍。王。を。封。禁。ぬ。り。開。心。の。心。死。ぬ。多。れ。も。死。身。中。に。

み。ろ。非。と。と。行。心。の。飾。る。と。老。實。心。の。薄。人。の。賊。殺。を。信。ひ。孔子。の。語。道。似。て。鳥。許。さ。く。思。ひ。

れ。語。の。い。ち。も。君。子。の。過。の。日。月。の。蝕。の。如。過。り。と。入。れ。を。仰。ぐ。改。る。と。人。を。仰。ぐ。と。い。ひ。ハ。死。身。の。

懺。悔。と。同。く。有。る。謙。遜。な。れ。も。其。頭。今。の。急。救。か。わ。い。小。可。甘。番。山。小。走。り。復。々。登。崎。生。の。隣。

尾。殿。ゆ。の。這。里。の。盜。難。箇。様。と。死。身。單。不。對。治。せ。れ。事。の。首。尾。と。報。知。る。隣。尾。殿。不。對。

面。の。折。詞。を。言。く。費。さ。る。便。り。宜。く。い。え。と。親。兵。衛。點。頭。た。て。る。美。便。利。の。計。い。れ。れ。も。老。人。を。

幾。番。脚。疲。ら。せ。い。心。を。伴。當。と。遣。ま。し。れ。と。辭。ふ。代。四。郎。は。金。否。別。人。で。い。不。便。之。小。可。走。一。

走のて来て入準備きて多のねと詞せうは老兵の性忠るれ疲勞と戦艦より出て艦板と
渡りて蕃山へ公をけり。今程は大江親兵衛の衣裳と更ぬ準備を敷て伴當兩三名の吟咄して陸
登り眺望見お出して隣尾判官伊近の浦巡りて若程は秋の日をれ尚處暑の節ゆあ短くも
日景の既ぬ没まて下晡より一時候出ま伴當走りぬ。隣尾殿の來ぬは遠里と距は
と法遠からと報る親兵衛領して若黨兩個と從へて奴隸兵鎗柳相圓坐草履を執せり馬
頭お出迎る程は隣尾判官伊近へ從兵を皆後陣に任めて二百許の究竟は士卒と前後左右
立一馬の上優路次とせり既ぬ近つ真先は照文主僕姥雪代四郎親兵衛の餘も志るは
船の案内は俱せられ金瘡見は便連の早乗せられて過後方は從ひける當下照文と代四郎は
歩を早せ親兵衛の辺りなる程は伊近馬より下立て登見お尻より撒れ居る土
卒左右別れて奔救とて蹲居る。徳而大江親兵衛は恭く判官の身邊に杖を近づて名
告とあり見參を登時伊近登見と放りて安房の勇臣大江生料らるる對面今日も和殿

們三勇士の武勇より我隊兵を多く勞まふ及ぶと水陸二不所の巨盜老賊はゆえ一旦逃亡
なる草賊四名小判較吸四郎棘鬚骨元龜八坂間田沙智七龍宮鶏魚太郎と歎喚做るも追
捕の網と免れ方僅都てお入りぬ愉快とら下。但憾ら蜚崎の從者二十餘個の金瘡
兒あり我隊の醫師を俱にれ亟に療類と加すお孰も幸い浅瘡也。此躬所おわれ安いと
いふ尚淹留を敷れ去城の頭を平愈の折返す。あ是什麼と懇切お問れて親兵衛阿と
むりお護て答る。最過分は御懇命添はせおいへる。去向を急せは金瘡兒們も船お載り
自療と施しおむ在下神傳經驗の良薬の貯ありあの受御ある安ふべ。今日の一擧奉り同船る
る蜚崎照文姥雪與保他們の寸功はも在下の小嘯囉をオお對治あるも。反て與保お極ま
死さるとお泡り畢竟照文與保も御武徳お憑り九死と出て一生と活れを。驥附の微功由
いひけり開を御療衣賞の倒し當りていと辯ふ伊近主守あむ否然おあむ。あはしくお和
殿の船の掙に一人當りとけげんや。那水中の組敷も瑕疵と做お足ら。任まて良家臣を

多持れ里見殿の果報を美次けれ係らる。懇態なる鳥辭の舊話に似れぬ。我曾祖渥美の郡領隣尾大夫信近。南朝の忠臣を將軍の宮宗尊親王遠江守井の城に御坐ありし時。其の躬方へけ。新田里見の人々と然し。舊交をたあふ。南南北面朝廷御和親の後。已とる。足利家小隨従と。本領安堵の今に至れ。然れ。今日各料ら。對面有。數年昔と。愧れて空谷跽音の思ひあり。我各感狀を。餽ら。彼他家の臣子。然る賞書を取。まの。世に。れ。舊好。れ。饒。れ。後。の。證。据。を。取。り。て。親。兵。衛。の。後。方。に。代。四。郎。を。找。し。出。て。御。談。忝。く。い。へ。ど。餘。人。知。小。可。い。大。山。道。節。を。舊。僕。と。大。江。親。兵。衛。の。姪。母。兼。小。等。に。因。り。て。這。由。縁。を。思。ひ。と。り。里。見。殿。召。寄。り。て。數。々。に。推。辭。を。照。文。傍。に。重。に。思。ひ。然。る。と。他。家。の。感。狀。を。賜。り。何。せ。え。の。美。饒。を。ひ。と。推。辭。を。照。文。傍。より。袂。を。披。て。制。し。も。代。四。郎。の。尚。憚。ら。思。ひ。隨。ひ。吹。く。程。伊。近。勃。然。と。面。色。変。り。て。い。と。は。り。び。と。思。ひ。く。ら。ち。領。を。適。ゆ。に。直。言。さ。る。世。忠。臣。者。誰。も。德。を。あ。べ。れ。

七 開と知ざるふあなれ。武功と只顧愛の故。実と思ひの足ざるを。各ある掛け。因て。美の。閣。に。入。り。何。れ。所。要。あ。る。有。司。の。命。に。亟。に。辨。明。を。切。て。報。い。せ。ま。ほ。し。け。れ。望。半。に。申。さ。る。と。向。れ。て。親。兵。衛。然。し。安。房。の。義。兄。弟。們。今。日。の。一。美。を。告。知。せ。る。後。の。便。宜。い。へ。ど。も。這。頭。を。央。に。海。艦。一。艘。を。以。て。威。德。を。示。し。船。を。速。に。央。に。送。り。安。房。へ。遣。り。し。つ。と。請。ふ。伊。近。王。も。皆。そ。の。易。に。有。司。の。命。に。甲。夜。の。間。我。の。船。を。遣。り。快。消。息。を。調。へ。よ。と。心。を。天。を。う。ち。仰。ぎ。て。日。景。の。既。に。果。ら。送。憾。し。の。思。ひ。今。日。由。是。を。還。さ。る。又。船。を。寄。せ。訪。れ。ん。と。祈。る。と。別。を。示。し。照。文。と。代。四。郎。も。叮。寧。を。詞。を。披。て。慰。め。ら。る。その。間。親。兵。衛。の。水。際。に。伴。當。を。招。け。大。家。あ。る。ゆ。に。牽。居。ら。け。生。拘。の。海。賊。柄。九。郎。破。船。二。首。を。甲。乙。都。て。七。八。個。の。素。合。を。縮。り。牽。り。寄。せ。隣。尾。家。の。兵。頭。錦。織。機。馬。親。兵。衛。を。從。へ。隊。より。出。る。親。兵。衛。對。面。し。て。武。功。と。譽。言。を。當。下。親。兵。衛。那。捕。捉。の。速。さ。に。快。い。を。舒。て。海。龍。王。脩。維。五。郎。の。首。級。を。合。出。て。生。拘。と。共。侶。の。卒。を。機。馬。解。せ。機。馬。親。兵。衛。

受捕し。馳て後陣に退く程なる主判官伊近の馬より跨り隊兵を招て歸城の路次をいそがせける。倭て又錦織が同僚より。田作岳四郎と喚做き兵頭。雑兵五六名。照文が伴當。野兵夫役。高工母の痲を肩より舁して後陣より出て來り。親兵衛並照文。君命と傳へ雜兵。吩咐て金瘡児を舁載果て然而親兵衛。們再會と契りて又隊の兵を領て奥郡の城へ退りける。本程。親兵衛。照文。代四郎。と共侶。恙なき野兵。自他の伴當といそ。早ら船を還りて一日も腰と放さず。茶釜。竜。とち啓く。則是別刑する。伏姫傳授の神藥。隨即是と一撮。伏し。臥る。金瘡児の瘡口へ一個も送る。く師。拭て布。痲を林。定と締。びて更。又。件。の。茶。を。水。お攪。建。て。飲。さ。す。神。茶。の。即。效。先。度。お。異。なる。金。瘡。児。們。推。並。て。疼。痛。立。地。お。退。り。て。心。地。清。舟。お。り。よ。け。り。お。の。折。り。日。の。暮。て。船。の。回。母。お。燈。燭。を。點。き。程。お。親。兵。衛。照。文。と。代。四。郎。お。談。さ。る。や。阿。叟。お。晝。裏。お。我。船。お。願。て。同。行。の。本。意。を。遂。げ。し。ま。是。忠。義。の。與。る。れ。も。そ。の。義。を。願。ひ。な。す。と。次。心。お。他。御。走。り。お。外。口。め。る。い。あ。べ。り。然。る。と。今。日。料。ら。せ。も。水。陸。二。不。所。の。武。功。あり。お。の。義。を

我小父と。我兄弟。犬田大山。報知し。這功を。那罪。償。んと。乞。禀。さ。有。司。後。ふ。の。徳。と。議。さ。し。正。る。思。免。疑。い。さ。る。べ。し。と。思。ふ。よ。う。て。隣。尾。殿。お。海。船。を。借。り。ぬ。疾。消。息。と。書。寫。さ。て。件。の。船。を。ら。つ。た。と。解。れ。て。代。四。郎。お。欽。ひ。ら。し。照。文。お。の。議。と。諾。む。ひ。て。然。る。と。咱。們。お。の。せ。ん。ま。と。俱。お。燈。下。小。筆。を。把。り。多。く。も。准。備。整。ひ。ぬ。親。兵。衛。お。又。照。文。お。ら。向。ひ。て。這。使。お。和。殿。の。若。黨。紀。三。六。を。借。り。ぬ。他。の。御。向。和。殿。と。俱。お。今。純。友。查。勘。太。と。搦。捕。さ。事。由。と。我。消。息。お。戴。し。ま。し。其。賞。さ。る。い。あ。べ。り。且。自。餘。の。犬。士。們。お。這。方。の。口。を。問。れ。折。答。詳。る。者。お。他。が。外。誰。う。ら。ん。の。義。を。兼。引。ぬ。ん。や。と。請。れ。て。照。文。異。議。も。な。し。開。け。紀。三。六。お。幸。ら。り。他。る。れ。と。く。お。の。使。使。お。相。應。し。て。下。の。思。ひ。お。和。殿。の。隨。立。意。せ。ら。ん。や。と。答。て。馳。て。紀。三。六。を。召。て。倭。と。吩咐。れ。紀。三。六。お。然。る。氣。色。よく。小。可。這。回。の。死。伴。お。違。さ。る。今。中。途。お。く。本。國。へ。お。返。さ。れ。ん。本。意。お。い。は。せ。既。お。今。日。の。賊。難。お。思。へ。前。路。お。心。許。さ。る。い。そ。お。の。死。使。を。餘。人。お。仰。付。さ。る。小。可。那。國。を。も。お。死。伴。を。願。い。け。し。と。推。辭。し。て。照。文。お。お。開。き。最。了。了。箇。へ。汝。伴。お。違。さ。る。も。大。江。燒。雪。共。侶。お。野。兵。伴。當。と

く領てゆく旅るれ事虧はせ何なる危なるあえや。あつ美へ我心ひらりて。汝不課方とる思ひを大江ま
 擇れられ此上るる面目まばれと諭は又親兵衛も云々と慰めて。照文と共侶の書翰と連與の口
 状を陳示し。心利を奴隷と俱し。今宵發船とせよか。といふ。立札紀云も。只得書翰と受
 合て。兩個の奴隷と共侶の準備と別船とせよ程の隣尾の有司の下知りて。安房へ赴く
 海艦一艘。那里の浦より漕りて来り。徳と親兵衛の報りける件の船。船宰領の雑色西
 個と隸れて。究音の高工枕師七八個あり。登時親兵衛の照文と俱し。船頭不出。来り件の
 舟人を勞へ。其高工枕師們皆の安房へ赴て。目今と順風なれば。曉方風易りや
 せ。いせせあへと催促せ。介程の直塚紀二六も。照文親兵衛代四郎以下。夥兵伴當も。遠く
 別を告て。兩個の奴隷と從ふ。件の船。乗程は高工們の船。帆を揚て。安房と投て。兒與震
 別路越ふ。杵る。徳而次の日の曉方。風は猛可吹易り。西へ赴て。軍と。里見の船。公高工
 母が四馬り。船を出せ。千餘個の金瘡兒們の。幾一夜。瘡口愈く。立拵は不障り。なれば。

夥兵伴當高工夫役們。一個も缺くる者あり。神茶の奇效勇士の武徳。憑
 か。まとのりる。ければ。人皆勇む。棹の歌。詞ひ連る。且。開は。船も發く。や。波の花の。八里の
 潮路の。蒼海原と。風小儘しく。走らる。往方。は。舟も。遙る。

第百千五 渥美浦の便船紀二六を送る
 管領郎の禍鬼親兵衛と抑む

却説直塚紀二六們が安房へ。初央船の。西三日の程。平群の。洲崎。本よければ。則ち。の
 浦。船を。駁りて。奥郡より。隸られる。船宰領の。雑色と。船。残して。を。俵。か。り。去る。こと。饒さ
 ぞ。然而。紀二六も。兩個の。奴隷と。伴。で。瀧田の。城へ。入り。来り。七。大士。們。來。意。を。告。て。親。兵。衛。と
 照文の。書翰。と。合。出。て。連。與。の。口。状。を。陳。示。し。小。文。吾。莊。信。乃。毛。野。道。節。現。八。大。角。も。初。の。計。り。申。し。
 驚。馬。に。後。の。相。款。ひ。て。俱。そ。の。書。翰。と。用。は。る。又。紀。二。六。を。喚。よ。き。其。事。の。顛。末。を。猶。詳。し。う。ち。听
 く。不。代。四。郎。が。這。回。の。武。功。実。不。意。外。の。拵。は。る。れ。の。之。欽。び。ま。さ。感。で。一。霎。時。も。留。む。奴。隷。を

先音音と妙真を招はるる程照文の宿所へ紀二六をかへ遣せ。社中も共
 侶も遠く出て見たり。然ハ八代内中社介の蟹崎の舊族なりと照文の宅眷を
 敢忌とて出迎へてよと問ふ。社介の紀二六と俱那地の椿事とて蕃山の賊難箇様々
 と照文が武功紀二六が忠戦都て親共衛が消息のいかたな趣を有る隨小解不ま折
 主助敷と今純友と生拘る。紀二六が言漏るるも照文の妻ら聴て驚愕なる亦
 秋ふ程老侯の近習に小湊目東峰萌云宅地瀧田の城内に在り且その職堂照文の
 下る親もあの庇も寄る留守の安否を訪へて連立て来れば社介は折
 折之我の對面をばれを馳て坐席の請迎へ先老侯の安否を諮る。然而親共衛が注進の
 事の趣悠々るれと真に示してその消息と讀する尚懐と搔撈る。思宜帝の間より照文
 が他們に寄せる書翰と出て遞與を毛。目萌云の思ひがけなく。這言と那書を見て奇也
 奇也と感嘆を登時社介聲と低め。かる夏を這處で談するを礼え。言公似て公

るぬ秘事外に稟試のむ異儀の號雪代四郎が疎忽の便船の事をも越度る。老侯の御
 仁慈を及て他が面目ありし。他們的も。知れ今番親共衛が消息も代四郎が請も。船の
 附行の心。這大功も。償ひをりま。欲する。其の宜計。よ。ひ。か。り。今。所。消
 息の在り。這願言の今。ゆ。要。る。似。れ。も。代。四。郎。が。那。大。功。を。稟。上。さ。る。あ。る。各。任。事。ん
 情地の。上。の。ね。憑。目。萌。云。共。侶。點。頭。て。開。蟹。崎。主。の。書。翰。も。具。載。れ。外。に。あ。る。ゆ。え
 此れを。答。馳。て。主。人。の。妻。と。紀。二。六。も。告。別。て。君。所。へ。と。ぞ。を。遣。は。る。而。大。川。社。介。の。紀。二。六。を。這。里。留
 め。我。が。伴。當。の。い。さ。ら。宿。所。か。ら。来。れ。れ。妙。真。音。音。の。大。士。と。譚。ひ。社。介。の。か。ら。来。る。を。な。る
 程。小。既。中。て。代。四。郎。が。那。水。陸。の。一。大。奇。功。及。照。文。主。僕。と。親。共。衛。が。當。日。の。擗。箇。様。々。と。听。く。危。く
 又。安。心。有。敷。系。不。慰。ゆ。れ。憶。を。時。を。移。あ。る。社。介。の。遠。く。の。照。文。許。か。ら。来。て。妙。真。音。音。の。對
 面。ら。自。餘。の。大。士。と。向。ひ。て。料。も。那。里。也。目。萌。云。が。来。ぬ。逢。て。面。談。さ。る。事。の。趣。悠。々。る。ゆ
 と。解。示。せ。大。家。い。と。く。相。款。ひ。て。開。け。又。ゆ。免。造。化。然。御。沙。汰。の。あ。る。を。な。る。事。を。な。る。事。と。あ。る。と。



六

養崎の宅
 子
 莊介目筋
 三
 と面談を



つるまき

六

備をせよと仰の趣かゝる如。因て儻々せられ大江注進別紙と共に三通を返す。別紙披露せしは是老館の免旨秘録とあり七犬弥心あり。今小創老侯の慈恩佛菩薩勝りあり。実の如く稱て情をさける。有徳一程小杜介の遠く兼書とあり。件を使を還し更一個の奴隷として紀二六を召きて明日夙稲村へ俱に在事の趣と洲崎の歌りとせし。奥郡の央船と今宵稲村へ程近港只程と等置置る。館の免下知ある折便り。利多をなれと。言送る多解示。紀二六を果てて洲崎へ赴けり。有徳折々眞音立目心かゝる君所の沙汰を什麼と思ひ落つて。てびきて来れば大士伯の事急と。老侯の慈恩至妙の便宜と。告る不執。兩個の老女の感涙坐み找む。覚左も右も幸言を君の恩恵に俯て思ひ仰は高き清澄山も。多めえと稱ける。徳而次の日曉方道節と小文吾の出仕の衣裳を整く。紀二六を俱。伴當も稲村の城赴く。紀二六を宿望も。更京師へ赴けり。照文們と安危と共せし。ほしを請ひ。道節も小文吾も。忠心と感づ。やくと絶の道程る。

このひみちのたすか。ころのむらさきあり。まのや。あやうらうら。とほすけはすも。ぬんぬ。りね。這日已牌過る時候稲村の城へ参上りて。出仕の両家老辰相清澄面謁し。奇子崎の旅泊より。大江親兵衛登崎。照文が注進の事の趣。並をを使とて。かゝる多めえ。照文の伴當直塚紀二六が情願も。漏さず具訴して。書と呈圖とせられ。辰相清澄俱に圖と。二子の武功高運と。只管の感と。己まも。是より先の義成主。今朝も。龍田の老侯より。近習小溪目と。昨日七犬吉の訴稟也。那注進の免。就て。這方へ斟酌の計いる。宜く下知あると。内意と示ある。そのと。あゝるる。今又最も。詳る。注進の書と。大士の訴。駭嘆と。定小姥雪代四郎。水陸両所の一大奇功。思ふ倍。感と。大なる。辰相清澄の件。事の趣を。義成主の免を。あて。その旨と。兼り。隨即道節。小文吾。仰の。今番親兵衛十一郎が。注進ふ。よ。て。知。召ぬ。往る。日。三河。奇子崎。及。蕃山。賊難の折。他們。並。小姥雪代四郎が。武功の。比類。を。開。必。歸國。の後。賞。禄。宜。御。沙汰。又。十一郎が。伴當。直塚紀二六も。王。扶。賊。徒。の。頭。領。今。純。友。查。勘。太。生。拘。り。る。爰。開。も。具。小。聞。食。多。開。る。

異日十一郎が宜く賞を乞ふ者、且紀二六が情願の事、素是忠義の與るれも、御要の美がわきま、進退他が隨意、又奥郡より隷される、船宰領の事、城主下知の依るも、中央船の御沙汰及れ、道節小文吾相計ひて賞錢を取せ、かへてその免錢の有司、談と數の多く受るべし、あま御前召されて仰渡さるべし、事目今の急散るれ、仰の所、件、の如くと、丁寧示され、是れ、道節小文吾の俱の言葉、稟し、退て有司、徳々と談、方、僅下知あり、有司、異議、多、財庫より、件、の錢、出さ、道節小文吾、指、を、且、紀二六が路費を、各、賜、る、那、若、黨、取、ね、と、る、る、る、る、と、の、金、の、共、道、節、小、文、吾、小、遊、與、本、中、二、大、士、這、有、司、們、が、職、室、隣、ま、一、室、退、り、て、親、兵、衛、と、照、文、與、は、報、翰、と、隣、尾、判、官、の、兵、頭、と、交、え、る、錦、織、機、馬、遣、ま、り、謝、書、一、通、を、書、寫、せ、然、而、直、塚、紀、二、六、を、召、登、し、仰、の、趣、と、解、示、し、て、路、費、の、金、子、と、大、江、番、崎、們、の、答、書、簡、一、通、を、遊、與、ま、り、か、紀、二、六、教、ひ、受、戴、て、あ、ま、過、分、も、思、ひ、ら、る、造、化、ふ、を、ひ、さ、れ、小、可、今、番、も、特、更、ふ、去、向、とい、そ

は、い、既、に、東、人、の、宅、春、告、別、と、罷、り、お、ま、だ、這、回、那、兩、個、の、奴、隸、と、伴、を、進、退、自、由、不、仕、り、ま、せ、中、央、船、又、ち、乘、り、て、先、三、河、を、赴、て、あ、の、美、を、饒、し、め、と、願、へ、二、大、士、領、に、て、开、も、亦、和、郎、の、隨、意、せ、よ、咱、們、の、港、口、赴、て、船、宰、領、們、の、對、面、せ、卒、と、馳、て、身、を、起、し、て、兩、三、個、の、伴、の、奴、隸、の、錢、を、馳、り、紀、二、六、を、お、て、件、の、港、口、赴、て、其、頭、の、守、屋、あ、り、は、れ、奥、郡、より、隷、ら、れ、る、兩、個、の、船、宰、領、と、召、登、せ、水、路、の、所、役、を、勞、ひ、且、當、館、の、下、知、も、永、樂、錢、若、干、と、賜、ふ、り、を、宣、示、し、ら、則、兩、個、の、船、宰、領、の、青、蚊、各、五、貫、文、及、船、八、と、當、工、五、名、各、三、貫、文、共、小、二、五、貫、文、を、蒼、船、の、申、込、騰、け、と、取、ま、れ、船、宰、領、們、の、合、名、を、額、と、衝、記、恩、と、拜、奉、致、し、涯、り、わ、かり、登、時、又、道、節、小、文、吾、の、隣、尾、の、兵、頭、錦、織、機、馬、與、り、謝、書、一、通、を、船、宰、領、の、遊、與、あ、て、り、や、御、高、大、江、親、兵、衛、番、崎、十、一、郎、們、の、地、を、賊、難、の、折、隣、尾、殿、の、武、德、救、厄、の、援、助、も、て、福、反、て、福、ふ、る、け、り、よ、當、館、聞、食、て、泰、晋、今、も、舊、文、の、不、測、不、慮、か、り、と、感、し、思、召、さ、る、と、况、我、等、の、致、知、る、べ、因、て、錦、織、生、の、謝、書、一、通、を、寄、り、欲、ま、る、意、と、宣、傳、ね、か、又、直、塚

紀三六も亦推返し西へ赴死て。まの伴の達も欲を因て亦復便船を三河まで遣ふと願ふ。
 二つ載らるべし。船宰領們も亦所て仰あるに在処へ罷る。今日その究音の風を聞
 才管高工們が喰ひの船と申す便宜之身の暇とあるべし。故に船公と管高工毎々西へ個召
 上もて這刀禰們が辛苦錢は是賜ぬと指示せ。大家款ひ拜謝して。錢を受會て退る程。紀
 二六も道節小文吾も款ひと別告を告。船宰領們と共侶の船中乗らる。介程小大
 山道節小文吾の伴當もて港口より又稲村の城へも。東荒川西家老の仰に従ひ
 なるて相計ひる件の趣箇様々々と申上て退るとある程。義成王の御ひて召よ其對
 面あり。代四郎が大功親兵衛並照文が。高運の事の顛末も。其具も所んと。面談の時程
 二六も二天士の夜に主僕俱ふ當城内に留られて。次の日瀧田へかけり。話分面頭然。又三河
 國渥美郡奥郡の城主隣尾伊近の判官の大江親兵衛並照文。雪代四郎們が武
 勇の擗り。或討捕り。或生物る。海賊の頭領海龍王。脩羅五郎。今純友。查勘太。及

伊近の隊の擗捕り。小嘍囉も。都て獄舎に敷糸し。尚支黨を穿殿金と擗向取。
 され。他們の道曾西國四國の舊巢破れて。脱れ來る。海賊也。其隊六十餘名の外。支黨
 等。と首伏せ。介る討捕ると擗捕ると。都て五十八名を。得五六賊の往方。知れ。是れ
 伊近下知と。又緝捕使と。処々へ出と。隈も。涉獵ら。苛子崎の波打際。うち揚られる。
 五六個の屍骸あり。件の緝捕使。并と檢まる。身も傷あるも。瘡も。面。框。九。庸。を。
 咸惡相。られ。野兵。水死の首。斬ら。推還。獄舎。衆賊。彼。他們。火家。
 下の小嘍囉。初那勇少年。數。惱。され。海。放。下。され。者。每。身。傷。あり。那。折。山。
 打中。る。ん。瘡。る。就。中。泗。法。至。妙。の。本。事。あり。小。頭。領。で。ひ。免。れ。去。て。漏。れ。天。訓。あり。
 あり。け。ん。と。ひ。け。り。あ。と。と。の。海。賊。六。十。餘。名。數。足。り。逃。亡。る。者。る。り。事。分。明。知。れ。伊
 近。則。有。司。下。知。と。查。勘。太。並。生。拘。の。衆。賊。を。采。心。誅。戮。す。脩。羅。五。郎。以。下。の。首。級。と。其。

昔子崎不鼻をせめて且その申明牌海賊餘波をかくる如く刑せられ今も渡海を志すべしと寫
 きて遠近示す。土民のころころ西海東海の船公管工門船と這處寄せて眼前に
 現るゆへに傳へるも是より俱安堵の思ひを做して昔子崎不鼻と宿を泊船漸次
 くるりて當郡の民這濱邊の家を併り店を用く客店あり酒肆あり。經紀見並て這里に
 聚合て敏赤昌世と云ふ者あり昔小易後より領王隣尾氏歿して地方の福也縁故を
 推して那里見の三勇士大江番崎姥雪門の逸早く海賊の頭領と成り首斬り或は生拘
 へられしを衆賊越ゆる根を断ぬ有徳に那大功武徳と後世に貽さんとて當年五山の学僧の
 渥美の某甲院に流寓て在りける課て剽盜の碑銘と為り最大なる石を勒して昔子崎不鼻を
 建ゆける有徳而百年許歴ある程あり一年洪波を打倒されて碑海に落没しよる人なき惜まら
 る。云云ある是後の語に且説かの日安房の稲村近江港口より直塚紀三六を復載し既歸
 帆既登り奥郡の兵船這回も波上にと安らるれば兩三日の程して昔浦邊から來り

そのときえんあまのちうら。昔子崎不鼻をせめて且その申明牌海賊餘波をかくる如く刑せられ今も渡海を志すべしと寫
 登時件の船宰領們の紀三六を伴て奥郡の城内に當家の兵頭錦織機馬の宿所赴た
 安房より歸着のうと想日天山道節天田小文吾連署の謝書と呈上り。語次水又い
 中。小可們那里より船をかまんと云ぬ折里見殿に沙汰を。宰領並船公管工門小永樂
 錢二十五貫文と賜りていひ。報れ紀三六も亦情願あり。更浪速不鼻も欲して又便船
 きて來ゆと。這地より浪速船小附て那地届らんと思事情を詳解具告て大
 士們感謝の口状箇様々々と演説し機馬の執事らして感佩特浅ら。紀三六の權
 且留りて。隨即主君判官事件のうと云え。十の伊辺主致して里見の君臣徳まを義我厚か
 るの本意不稱。件の直塚紀三六を。主と云え。照文を封助て查勘太と生拘り。功あり
 らる浪速へ赴く水路の宜く計ひ給え。町寧に課せらる機馬の唯々たるる果て退りて
 紀三六。君命の趣を告知せざるも宿所留り置て浦邊へ向て便船と尋る。尼之崎へ赴
 く海艦あり。順風ありて詰朝發船と云え。紀三六も。回も去向の便り。錦織の奴

八代傳九車新書

謀小送えて件の浦邊赴折先機馬より向ひて城主洪恩を拜謝別と告て退りてその船の
うら乗る城主の下知ある行客され船公富工又同船見え皆紀三六を敬ひて船中豪も費用
被て現紀三六と主とあり誠心あれ海神の真意も稱ひ猛風劇波の真愛あり約莫一句
有餘の程あり船中津國なる尼之崎を果ける休題再説大江親兵衛登崎照文の渡
海の船御向子崎を中より日毎順風あり水路の淹留稀あり秋八月の中旬浪速届
ることに猶權且船不在先代四郎と遣いて京師の光景を探るる裏お大飼現八公辭示し
崖略也最詳不知なるその事の顛末と親兵衛熟うら听后前將軍義政公の辭職の後も風
流の驕奢を錢を抛ち財と竭して民の怨訴をえりぬる況治世四十餘年の程國亂れ民苦むるを
屑とも思ひある僅五年の間を九ヶ度の大和太極食をえ行ける就中八幡春日雨所の御社
參伊勢御參宮花の御幸河原の猿樂も遊興の費も亦有り是れ民の歎はる花の御
所の大造營土木の工も起されより萬民の費りも珠玉を磨き金銀を鍊ゆる處の價

六万緡
鉄六千貫
文これ
額三貫文
と小判一
兩
田租の全
小堀の全
六千兩
下下之二
五錢二十
貫文これ
亦金高て
三兩の當
り
子の價
子の如
過本
費の甚
足れり

慮六萬緡及義政の父母と御基所の兒與高倉の御所を造りしは腰障子一回の價二
萬錢之の嚴美壯觀萬民の財貨を絞めて飽ませ集て七條の人工と盡きたる餘是を
りて知る死の然れ義政の不徳かみで只奢侈と昔とて及政事小荒とあり威權遂管
領三職七頭を推得りて宗全勝元の内乱起り是を心仁の擲亂と其の殃危の根本初義
政父子あり一は御舎弟今出川殿 義 還俗と薦めまわして養嗣とて誓約あり一は
後御基所の兒腹義尚誕生すれば義政の死志始り似たりけり况御基所の兒歎き方
も有り一は有一日事の叙次とて情地お山名宗全に憑せぬよりおられ宗全異議を兼ありて
いづか今出川殿と退けて必幼君と立まらせんと票けり抑山名持豊入道宗全性も嘉吉の
逆乱も赤松満祐を討滅する大功おは但馬播磨備後三不圖を領し且管領細河勝元
兵有るも威福を管領 瀬崎の上お出は又勝元も初兒子ありたの故宗全舎子と養嗣
あり実子政元生れは養子と強て退けて竟僧をせれば宗全痛くはの義を怨も勝元

八代傳九車新書 三三

不和ありぬ。比又斯波白山兩管領も家督争ひの事あり。各藩も聞て。初白山政長。勝元見し。肩あがり。宗全も方人なり。勝元と不和あり。及び宗全。白山義就。荷擔あり。これを立金とす。又斯波の争ひも。義政公沙汰して。義敏と退けて。義廉と立金。起る。小程。勝元。宗全。御基所。預られ。幼君。立金。欲きを傳。勝元。今出川殿。義親。立金。左右。程。白山政長。義就。閉戦。都下。起り。勝元。亦多勢。政長。幫助。宗全。義就。敵。大軍。起。見し。肩の母。所親。人々。東西。立金。閉戦。浴中。言。兵。孫。火。焼。占。萬。民。四。方。離。散。けり。這。兵。初。義。就。政。長。が。家。督。争。ひ。事。起。り。遂。に。勝。元。宗。全。の。争。ひ。端。を。發。し。又。義。親。義。尚。叔。侄。の。争。ひ。も。有。り。有。徳。義。政。約。不。肯。は。い。義。親。と。退。け。義。尚。を。立。金。と。思。食。る。僻。事。の。事。斯。波。義。敏。も。養。嗣。を。後。に。実。子。松。王。丸。生。れ。初。の。志。を。轉。じ。又。勝。元。亦。白。山。の。養。子。を。後。に。実。子。生。れ。俱。ふ。る。家。族。を。け。然。し。將。軍。家。の。官。領。も。皆。是。世。嗣。

よ。依。れ。知。亦。山。名。宗。全。伊。勢。貞。親。が。時。の。權。勢。を。兼。て。或。人。の。家。に。授。け。或。傾。け。を。僻。心。是。も。亦。相。似。し。定。人。の。世。嗣。を。大。事。と。し。昔。北。條。義。時。頼。朝。の。後。絶。し。を。近。く。南。北。兩。朝。の。争。ひ。も。皆。是。世。嗣。の。事。起。り。天。下。の。大。乱。も。做。れ。り。と。一。歳。も。做。ま。り。或。学。究。の。咄。也。然。し。心。仁。元。年。小。治。大。乱。起。り。上。七。條。及。び。文。明。五。年。小。宗。全。勝。元。の。續。絶。世。を。去。り。け。れ。も。猶。も。毎。の。諸。國。を。戦。ひ。休。ま。ず。前。後。十。七。年。と。文。明。九。年。小。宗。全。勝。元。の。餘。黨。戦。ひ。疲。れ。壁。言。野。燎。の。如。く。滅。て。り。如。く。干。戈。を。廢。り。理。り。て。萬。民。安。堵。の。思。ひ。傲。一。是。是。より。先。文。明。五。年。冬。十二月。義。尚。童。年。九。歳。也。征。夷。將。軍。正。五。位。下。左。中。將。の。做。り。ぬ。政。長。政。元。河。管。領。も。義。親。の。美。濃。へ。赴。り。土。岐。成。頼。も。瀨。上。に。在。り。是。より。争。ひ。の。路。絶。て。世。間。靜。悄。る。の。事。諸。國。の。大。名。も。致。し。又。將。軍。の。命。令。に。從。ひ。各。方。征。割。据。を。世。に。戰。國。を。做。り。け。り。徳。而。文。明。十。一。年。冬。十一月。義。尚。十。五。歳。也。判。始。評。定。始。あり。是。より。身。自。為。政。ぬ。義。政。の。東。山。を。東。求。堂。御。座。と。し。茶。事。亦。耽。り。ぬ。先。

度も徳りありて古器古物を弄び、奇石名花を賞み、哀北山を金閣と擬て、（金閣）銀閣と
 造り、（銀閣）四十餘歳を、（銀閣）の御具もまろけられ、財用は窮乏を、武功は諸士に賞まらざる由り、
 之の故に刀劍の價を定め、開上人を賜て、その加恩の地代は是よりして、義政は東山殿と
 稱する。その生涯の過奢放逸は、如く言はれる。尚幸は義尚將軍、少年より賢良の
 幼少は、三馬の家業を承け、由りて、文学と書法も習ひて、拙くは是をりて、小槻宿
 禰雅久の論語を講せしめて、その美言、又卜部美保、日本紀を講せり。尚古の思は、成り
 らざらん。僅か十一の秋七月一條の太閤の請ひて、樵談治要を撰まて、政事の資助に
 大いにけり。然り折々、詩歌の會も興あり、又室町花の御所の庭前、大追物を尚言も展
 る。たとひ、その君治世久しく、足利家の中興疑はる。世人思ひ、言はれども、借りて、
 世に生れり。將軍のまじり、もろく隨意を政め、くも、父東山殿の年來、善信を賞
 り、勝元宗全が、母の兵乱十一年、及び、同公家武家俱く衰へて、京師の京師の儀、く

（そのころ）飯尾彦六左衛門の歌の、汝やあるみやの野鳥邊の舞、雲雀のなるまは、けり、落
 る涙も、と詠ると、然りと想像あり、有はれ、朝廷の御料も、年來、漸く衰へ、搦家槐
 門と、宣せども、困窮至極を、ある。その時、勤王忠義の母、錢財を調り、必例外、勸
 賞あり、所願あり、若願、宣せ、勅許疑ひる。よ、その風聲、代四郎、詳に探り、浪
 速の浦、かゝる、然而、件の事の顛末、親兵衛と、昭文、其を報ると、半响許、親兵衛、これを
 うち、听て、介ら、事成る。今、管領の威福、ある、孰る、を、知ら、ま、や、と、向、代四郎、然り、政元主の
 故、管領、勝元主の子、ある、と、亡父の遺福、ある、第一の權臣、願事、ある、人、依り、され、成ると
 る、と、人、み、み、又、畠山、政長、主、勝元主の女、婿、ある、小、応、仁、以来、の、兵、乱、ある、を、那、那、助、と、り、見、見、
 管領、補、せ、られ、權、威、政、元、主、及、べ、く、も、同、席、の、同、席、の、人、も、異、る、を、ぞ、あ、ろ、
 あり、て、と、親、兵、衛、點、頭、と、然、京、師、へ、と、一、千、十、數、兩、の、白、銀、と、土、宜、と、分、ら、
 七八箇の長櫃、と、千、個、許、の、夫、役、お、昇、り、の、餘、の、夫、役、と、十、個、の、夥、兵、と、代、四、郎、と、俱、お、留、め、

尚も三貝金の守衛とて却次の早天より親兵衛と照文の長権と昇る。夫役們を先
 立ち各伴當とて京師へ赴き管領政元の邸へ伺候とて家の家宰をける。香西復六は就
 束意と演且主君義成の呈書と白銀五百兩と土宜幾種致都て目録と共に遞與しければ復
 六異議なく受合て退る。主君政元披露し姑且と又出て来て親兵衛の向ひて里見殿の御
 書並不寡君左京兆の政元と贈り来され件々と隨即披露仕る。異日將軍家言上と及ぶ
 へ旅亭へ退りて又沙汰を等身と命せられ抑旅舎へ那里と伺を親兵衛うち所々
 安房より水路と来しければ船へ歌浪速浦小在のまき旅亭へつと答ふ復六領てあへば
 咱們安房内を去し箇様々々の処に九竟の客店あり。調頁の貨財を運けし是れ進退
 へと誨て木牌を遞與せ親兵衛の照文と共に保銀の演辭去て船を自出政長の邸へ赴
 け又來意と告て東西を進らんと都て始小異なる。有徳而親兵衛香西復六指揮し依り
 二條頭小歌店と定めその註朝而三個の伴當と夫役と浪速津を船へ還りて代四郎小

告代四郎欽びて準備し又其次の早天主君獻の韓權成固と巻絹土直る。居るの夫
 役小昇りて陸續とて京師へ赴き管領の雜色あり十個の親兵衛。加納管領の木牌あり
 人々を路を譲らぬ。是より浪速の浦を歌船へ西三個の奴隸と船公堂高工の才小残
 置けり。徳而燒雪代四郎の連の路次といそがて下浦へ親兵衛の旅宿小を来しければ親兵
 衛の照文と俱小端近く出迎へて貢獻の韓權を餘の東西も感負坐席の上座へ昇らせ積並て
 日夜の小心も困る。徳と又親兵衛代四郎とて香西の宿へ使小遣りて案内依て三條小旅
 宿と定めると浪速の船より東西悉く合ふ来り志趣を告て歎ひの心を小替代の黄白
 一裏と贈りて異日官府の沙汰あらん折の百までと町堂小瀬心けり。余程の管領左京大夫細
 河政元次の日室町花の御所へ出仕と左衛門督自山政長の里見安房守義成の使者大江親兵
 衛に並小登崎十一郎照文と喚做者們が安房より昨日到來してまある書割の趣箇様
 箇様と解示し且その書とて其共侶小將軍義尚公の御書とて先

兩管領の意見と向ふ政元答旨示さる。義成東隅の藩屏と敢て千里遠を辭せし。貞進の
 礼儀も不淳なる忠信の致す所願ひ稟去姓氏を奏聞せらる。萬原宗景領て於て
 其趣を東山殿へ宣上て以て上意伺ふ。其の尤衛門尉ありと仰せ政長兼て退て東山
 赴て義政公里見の一條箇様々々と宣上て其書御覽入れ。義政合笑と尚て其の
 後財用不足公武俱不如意多し料も補助せざる報ひらる。其の例の有替姑息にて奏聞
 勿論多し。他事多し仰合ゆる政長兼り罷りかゝて義尚公忠と件の返命と稟上り。再
 議不及ぶ。即便里見義成奏請の事の顛末を家臣八個の犬某の氏と金碓と更ゆ賜
 りと願ひ。具奏聞せられ。是より當朝の諸司百寮事の可否と詮議あり。或は古
 より氏と改と請なる者勅許の例ありといへども。他們里見陪臣も亦へと。議も亦あり。或は又
 他們的陪臣も亦も義成の父義実の外侄と宣われ。必由緒の兵毎を二年と御領嗣之と朝政
 行事感發れども。義勅許り。廿六日。貢物も退られ。秋了簡中を死る。小を。と。議も。閑白

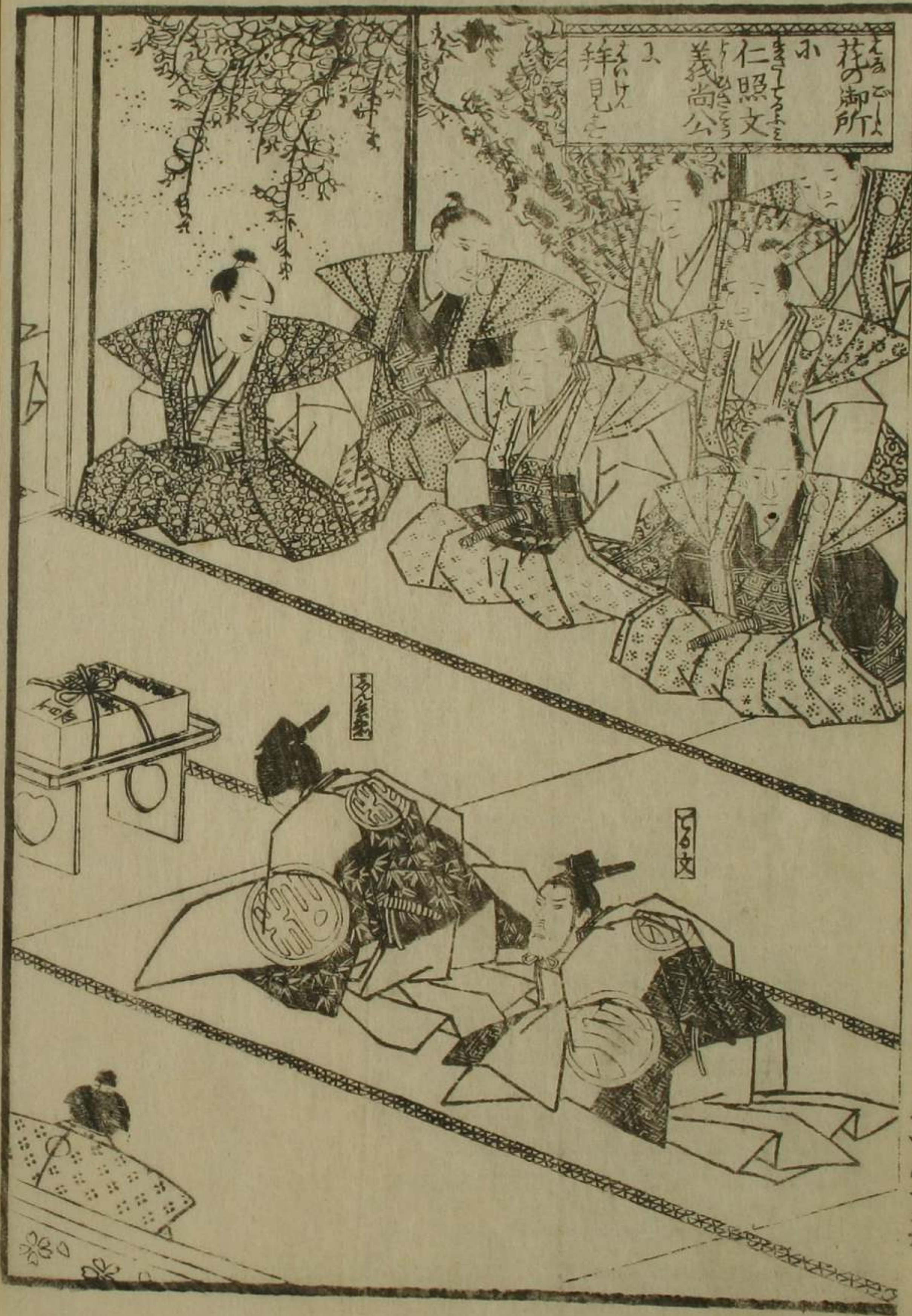
殿所にて時盛衰あり。事小用捨あり。八代陪臣も亦も。他們が願ひなる。亦も。主里見義
 成請稟を將軍奏聞せられ。然れ。勅許あり。亦も。氏と陪臣も賜あり。酒義成賜るを
 義成受て。八代士授る。事小條理あり。超級譜上の傍議る。亦も。仰諭を。ひら。と
 衆議遂に一決。主小奏聞せらる。躬て義尚將軍勅詔あり。宣上り。成。下され。その
 書。文明十五年八月二十五日宣旨。右肩小細書。上御木原。前治部大輔源義
 實朝臣外任安房守兼上總介源義成朝臣家臣大江親兵衛仁犬塚信乃成孝。大山道
 節忠與大阪毛野智大川莊介義任大村大角礼儀大飼現八信道大田小文吾。順
 右八箇勇士依義成朝臣之奉。宜為金碓氏因賜姓宿祿。藏人右少辨藤原
 朝臣秋豊。奉。と。あり。其の義秋豊朝臣も。室町殿へ執連稟上り。信而。又。の。次。日。小。改
 元奉て。親兵衛と照文を。郎へ召よ。て。對面あり。姓氏の。既。勅許の。油。沙。汰。小。より。明日。而。宣
 東へ召よ。る。辰牌時候参上りて。見参入り。なる。べ。の。餘。の。信。を。香。西。復。不。談。



八代傳乙昇卷三十三

花七

○文樂堂



花の御所
仁照文
義尚公
拜見を

八代傳乙昇卷三十三

○文樂堂

○曲亭翁編演里見八犬傳第九輯下帙中画工筆畀割刷目次

出像畫工

淨書筆工

彫工

卷十九廿一
卷二十廿三
卷二十二

柳川重信

谷金川

横田守

森田某

櫻木藤吉

南總里見八犬傳

第一輯より第九輯下帙の上まで大九六十二卷年々刊行のまゝに下帙の中五卷の度出版

近世説美少年録

第一輯より三輯まで曩に刊行してより年々揃出の第四輯五輯の各五卷八犬傳結局の後推して出版遠く

開卷驚馬奇俠客傳

第一集より第四集まで二十卷先年既に刊行の第五集四十一回以下八犬傳圍口の後作者必稿を続して第五集五巻迄刊

莊蝶翁再遊外紀

夢想兵衛蝴蝶物語の一書前後二編今も世に因て曲亭翁翁として又の編を刊布せよ欲すの第一集五巻迄刊

著作堂一夕話

この書翁の隨筆といふも世俗不詳一易く書かれりるる因て通俗を旨とせんと必裨益言を添へて○大本五巻迄刊

右曲亭翁新舊著編の各自の皆本房の藏板もとの餘り不買ふ所へ 活書林 文溪堂謹誌

大阪

河内屋喜兵衛

東京

須原屋茂兵衛

同

伊丹屋善兵衛

同

山城屋佐兵衛

同

敦賀屋九兵衛

同

小林新兵衛

同

秋田屋太右門

同

丸屋善七

同

河内屋茂兵衛

同

和泉屋市兵衛

同

河内屋和助

同

須原屋伊八

同

秋田屋市兵衛

同

出雲寺萬治郎

同

出雲寺文次郎

同

宛屋喜兵衛

西京

村上勘兵衛

同

辺江屋半七

同

勝村治右衛門

同

長門屋龜七

同

杉本甚助

同

三家村佐平

名山閣

東京芝大神宮前書舗

和泉屋吉兵衛發售

